
戦えない力

朔癒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦えない力

【NZコード】

N6192S

【作者名】

朔癪

【あらすじ】

戦争が三国で激化。戦況は均衡状態。

そんな中、ごく稀に異形、異能な者が生まれることがある。世界のその者達への反応は、様々であった。『亜人』と差別するイディア帝国、同じ『人間』として平等であるミーラル共和国、『天人』と崇めるワース王国。

そんな時代に『戦う力』を持つて生まれなかつた主人公の話。
(これは転生物ではありません。)

生前（じゅうぜん）

「…………は？

ぼく…………だれ…………？

なに…………も…………わから…………ない…………？

これは…………きおく…………そうし…………つ？

あれ？

なにか…………あたたかい？

す「ぐく…………きもちいい…………。

——少年？は手を動かした。

あれ…………？す「こし…………しか…………「う！」かない…………？

「あなた！！…………今…………動いたわ！！！」

『本当に…………？』

なにか…………きこえる…………？

「ええ。名前決めとかなきやね…………」

『それなら、ノルンってのはどうだ？』

——女人の声が響いて聞こえる。
——男の人の声が遠くから聞こえる。

ああ…………そつかあ…………。

ぼく…………まだ…………うまれて…………ないんだ…………。

——そこで少年？の意識は深く沈んでいった。

――少年? はまだ真つ暗な世界にいる。

「うう……。

まだ……うまれてないみたい……。

「ねえ、あなた……本当に……ここなの?」

また……声が……聞こえる。

これ……お母さん……?

『ああ、今の地位に未練もない
「でも……」

――少年? の両親は真剣に話し合っている。

なにか……とおどこ……?

『それに生まれてくる子供の為だ』

「……」

『この子の明るい将来の為なり、俺は何でもしようつ』

「あなた」

あたたかい……。

――少年? は真つ暗な世界の中で明るいを感じた。

「…ありがとう」

『ああ。ミーナ、たまに行こうか』

——少年?の両親は

『むこうを待たしていろ』

『ええ、生まれてくる子のために行きましょう』

ああ……まへなきつと……しあわせになれる

——その日、少年の両親は亡命を果たした。

生前（じょうぜん）（後書き）

初めまして^ ^

駄文ですが、頑張つて書いていきたいです（^ ^）
一人でも多くの方に楽しんでもらえる小説をめざして

作者は感想や評価をいただけると、とても喜びます。

サブタイトルは、生前せいぜんだと死ぬ前しうがんという意味なので、
生まれる前の意味をもつた生前じょうぜんにしました。

少年?となっているのは、まだ少年が生まれていないからです。

闘技 (トウキ)

ああ…、空が蒼い。
いい天氣だなあ。

キツーン。

——剣がぶつかり合つて、音を奏でている。

——少年は目の前で闘技とうぎが行われているのにも関わらず、空を見上げていた。

ガツキ——ン。

——闘技をしていた者の剣が飛んだ。

「…負けました」

「闘技終了！ 両者下がれ！」

——剣を失った者は負けを認め、その場から下がった。

「次、ノルン・カリーミア対ロック・マリール、両者前へ！」

…俺の番だ。

「「はい！」」

——ノルンと相手は声を上げ、己の武器を持って前へ出る。ノルンの武器はフルーレ（練習用）と盾。

「両者！ 魔法、武術、知略、全てを駆使し全力で臨み勝利を得なさい。手を抜くことは相手への侮辱です。」

——審判（教授）はいつもの決まり文句を言い、両者を見渡した。
——ノルンは戦う構えを整え、闘技相手を見据えた。

——体型は、俺より大きい。武器はロングスピア。ロックとは初めての闘技だな。
ロックは大きな魔法を使えない。

槍は突きに特化しているが、攻撃後、つまり、突きの戻る瞬間に一瞬の隙ができる。

……よし、これでいいつー

——ノルンは戦略をたて、万全の状態で審判の合図を待つた。

「……では、両者、よろしいでしょうか？」
「「はい」」

——ノルンはミーラル共和国の首都ミール、その中にある最高の教育機関ミール学院。唯一の都営学院で、共和国中の優秀な人材が揃う。ここでは、魔術、武術、基本知識など様々なことを学ぶことができ、将来、軍の指揮官などエリートを多く輩出している。故に、貴族が多く集まる。また、異形、異能の人たちが半数を占めている。
——この学園の特徴は、徴兵を免除する代わりに、授業に『闘技』を取り入れているということだ。『闘技』とは基本一対一の実践形式の闘いである。

——そして、この日も実践形式の『闘技』が行われていた。

「「よろしくお願ひします」」
「では……闘技開始！！」

——審判により、闘技が開始された。

……初めの一撃が勝負！！

——ノルンはわざと相手のロングスピアの攻撃圏内にはいり、相手の槍を見つめる。

——全神経を相手の攻撃に集める。

——ロックは攻撃にうつった。

突き！……はやいが、十分かわせる。

——ノルンは、盾や剣で攻撃を受けるのを嫌う。

——彼は力が弱く、攻撃受けると押し負けてしまう。

ここだ！！

——ノルンはロックが突きから戻る隙をついて、ロックの喉元めがけてフルーレを突き出した。

「……負けました」

——フルーレは、ロックの喉元で止まっていた。

「闘技終了！両者下がれ！」

「……ふう。」

……思つた通りにいった。正直嬉しい。

——ノルンは元場所に戻った。

「さすがノルンだ！」「すげーい、一瞬だつたねー！」「なんであんなに綺麗に決まるのー？」

――何人の生徒がよつてきた。

——ノルンは一人一人に丁寧に返しながら、空を見上げた。

……今日も勝ててよかつた。
……こんなとこでは負けれない。

——ノルンは学院の中で闘技において、上位にいる。

――だから、どんな相手でも全力で集中して臨む。

「ノルン」

——闘技相手のロックが話しかけてきた。

「やっぱりかなわなかつたよ。……どうやらそんなんに強くなれ
るんだ?」

「……努力あるのみだよ。あと……」

——ノルンは努力を十二分にしてきた。しかし、それだけじゃない。——ある一つの思いがノルンを強くしている。それは……

「俺には絶対に負けたくない奴がいるからね」

闘技（とうぎ）（後書き）

一話目投稿しました^ ^

戦闘描写がむずかしいです… T _ T

誤字脱字など見つけましたら、教えてください^ ^

作者は感想、評価が大好物です

フルーレは練習用のレイピアです。

――闘技後――

――武術専攻クラスの教授が「急だけど明日編入生来るからね~、
はい、今日は解散~」と教室を盛り上げるだけ盛り上げて、今日の
学院は終了した。

――学院への編入生はめずらしい。この学院は他の学院と違い、入
学試験などは無い。共和国中から、スカウトをして入学生を決めて
いる。普通は新入生として入学するのだが、学院側がずば抜けて優
秀と判断した場合のに、その生徒に応じた学年への編入となる。

――放課後――

「いらっしゃ……あ、おかえり」
「ただいま」
「おかえりなさい」

――ノルンの家は喫茶店だ。今日は客がいなかつた。

――父親のマーク・カリー・ミアと母親のミーナ・W・カリー・ミアが
経営している。ミーナのWとは、ワース王国の独自の文化らしい。
「ノルンが受け継ぐ必要はない」とミーナは言っていた。

――両親はノルンが生まれる前にイディア帝国から亡命をした。帝
国でのマークは帝国直属の鍛冶師であつたらしい。腕は確かに地位
が保証されていたが、ノルンの為を思つて亡命を決意した。

「ノルン、今日の闘技はどうだったんだ?」
「勝つたよ」

「さすが俺の息子だ」

……いつもセツヒツばかりだ、父さん戦えないじゃん。

——心中でセツヒツぶやいたのはノルンだけの秘密だ。

——マークは子供のときから鍛冶一筋の人間だつたらしい。イディア帝国では鍛冶師には徴兵が免除されている。武器・防具と兵士の比率を合わせる為だ。なので、マークは一切の戦い方を知らない。

「あら、わたしの子でもあるのよ？　はい、ノルン」

——セツヒツで、ミーナはホールドを渡してきた。

「ありがとうございます、母さん」

——母親はワース王国の人間だつたらしい。なぜかイディア帝国にしてマークと出会つたらしい。詳しくは本人も話したくないらしい。

「ノルン、今武術専攻クラスで何位だ？」

……きっと闘技での順位のことだらう。

——闘技では、勝ち負けによってランキングが発表される。

「クラスでは1位だよ」

「ほつ。さすが…

「はいはい、もうこいですから。」

——リーナに遮られた。

……はあ、ラブラブだな。

「わかつたよ……。学年では何位なんだ？」

「まだ2位……」

——闘技はすべてのクラスが一緒に行われる。

——強さは次の順になっている。魔術専攻クラス - <武術専攻クラス - < 知略クラス

——1位は魔術クラスの学生だ。

——知略クラスは主に戦略を練る方に特化しているので、闘技ではあまりいい結果を出せていない。

「……」

——マークは何かを考えている。

「なあ、ノルン。……剣を持つてみないか？」

「剣を？」

「あなた……、そうね。そろそろね……」

——ミーナはわかつてているようだ。

——剣はフルーレを持つていて、新たな剣を持つてことだらうか？

——ノルンはわからなかつた。

「あまりこの国では知られていないんだが……、鍛冶師のしきたりでな。子が徴兵する際には自分と母の魔力を注ぎ込んで子の為に剣を打つた剣を持たせるんだ」

「それでね。その剣には特別な話があるね」

——ミーナが昔話を話すように話し始めた。

「昔、ある鍛冶屋を営んでいる家族の子が旅にでるになつた。鍛冶屋の主人は持てる技術のすべてと主人と妻の魔力を注ぎ込んで打つたの。…気持ちだけでも一緒にいたいという気持ちを込めてね。その剣には特別な能力を宿つたつていう話」

「その特別な能力つて？」

「さあな。もしかしたら何もなかつたのかもしれない。現にしきたりだけ残つて能力はどれにもやどつてないしな」

「あら、あなた夢がないわよ。子の為に打つた剣には力が宿るつて素敵なことじやない」

…きっと能力はなかつたのだろう。

——ノルンも現実的だった。

「…話を戻そつか。そろそろ腕も上がつてきた頃だから持つてみたくないか？」

魅力的な話だ。今使つていいフルーレは学院から支給されたもの。お父さんは一流の鍛冶師、能力あるなしにかかわらず、俺を強くしてくれるだろう。

「持つてみたい！！」

「よし！！よく言った！！」

「どんな能力付くか楽しみね～」

——その剣がノルンの運命を大きく変えていく。

両親（後書き）

説明パートですへへ

次回はストーリー進めます。

思つてこじるこじる文にするの難しいーーーー

編入生（前書き）

ちょっと変更 . . . (付け足しのみなのでそこまで変わつていませ
ん)

あまつ変更しなつゝにしてこれたいです^ ^

――次の日――

――剣については、どんな剣にするかがノルンへの宿題となつた。

……やつぱりレイピアかなあ。刀でもいいかな……。

――ノルンは教室に着いてもずっと考えていた。

――教師と一人の女子生徒がはいつてきたのにも気付かず……

――教授は編入生に自己紹介を始めさせた。

「ミスト・ホールです。私はリエミアから強くなる為にきました」

――リエミア・ミーラル共和国内だが、ワース王国トイディア帝国の国境のすぐそばに位置している小さな都市。

「異能を持つっています。皆さんよろしくお願ひします」

――異能と聞いた時、教室はざわめいた。

――異能とは、生まれつき人より優れた力を持つていることだ。具体的には、目が驚異的にいい、耳が良すぎる、魔力が高いなどがある。また、異能に対して異形がある。異形は、外見的な物だ。翼が生えている、体が異常に固い、力が異常につよいなどである。――異能・異形を持つた者は百人に一人位である。その中でも、異能は異形に比べ格段に少ない。

「ミストさん、何か質問はある?」

「……一つだけ。……このクラスで一番強いのは誰ですか？」
「ええと……どういう意図で聞いているの？」

——教授は予期せぬ質問に戸惑っていた。

「……私はその人と闘技をしたい」
「それは……決闘？」
「はい」

——決闘……生徒同士で教授の立ち会いのもと正式な闘技を行うこと。

……両手剣つてのもありだな。

——件の1位はまだ剣のことを考えていた。

「……ノルン君、どうしますか？」
「……」
「ノルン君？」
「あつ、はい、良いと思います」

つい反射的に答えてしまった……。

しない女子がいる……、編入生か……。

——前を向いたノルンは、赤い髪、緑と赤の目のノルンと同じくらしいの体格の女子が立っているのが見えた。

——正気に戻ったノルンは、それまで聞き流していた話をいつきに理解した。

決闘？ええと……、すごいタイミングで頷いてしまった？

——編入生のミストは異なる2つの田でノルンを見据えていた。その瞳には強い意志と自信を感じる。

まあ、いいか……俺は負けない。

——ノルンも自信をもって相手を見据える。

……綺麗で力強い瞳だ。……強そうだな。

「では、この後すぐの一時限目に決闘を行います。一人は準備を」

——教室がざわざわ騒ぎだした。賭けをしている生徒もいる。ノルンに声をかける生徒もいる。

「負けるなよ」「ノルン、頑張れ」「良い闘技を」「女の子だから優しくな」

……最後のだけなんか違う。。

——1限目——

——たまたま闘技場を借りることが出来た。

「では……両者前へ出でください」

「「はい」」

——ノルンとミストは自らの武器を手に前にでる。ほかの生徒は観客席からみている。

——ミストの武器は両手剣のフランベルジェみたいだ。柄に魔導石が埋め込まれ、魔法を使える。防具に両肘両膝に鎧をまとっている。

——魔導石とは、魔法を使う時に手助けをしてくれる物だ。上位の魔法使いになるとこれがなくても魔法を使える。

「フランベルジエか……、実践的な武器だな……。

魔導石も埋め込まれているのか、どの程度の魔法がくるのだ？……。防具がない？受けるより、避ける闘い方なのか？

——ノルンは全く強さが未知な相手なので普段より警戒している。

「魔法、武術、知略、全て用い勝利してください。手加減は相手への侮辱です。」

……異能も持つてゐるのも厄介だな。

闘いながら分析するしかないか……。

——ノルンはいつも通り戦略を練つた。

「……では、両者、よろしいでしようか？」

「「よろしくお願ひします」」

「では……闘技開始！」

——の闘技が二人の出会いだった。

編入生（後書き）

ヒロイン登場です^ ^

初めは説明が多くなるT_T

次はヒロインとの戦闘だけで終わるかな?
更新途切れさせなよう頑張ります

駄文ですが次もよろしくお願ひします
評価、感想くれると踊つて喜びます

決闘

「闘技開始！」

——ミストはすぐ呪文を唱え始めた。

「遍く炎の精達よ（ルティンズ デ ラ フラム）、我的目の前を
駆け抜けろ（トラベズ モ トレ デ デヴァント ラグメント）」

「

……あの呪文は、中位の炎の弾丸の魔法。

弾は大きくないが、速い。ただ、打つ瞬間、術者の前で一瞬停止してから発射する。

——ノルンは頭の中で魔法の特性を確認した。

——炎の弾丸はミストの前で一瞬停止した、その瞬間に一歩横へ。

……よし。

——ノルンは無事避けたが……

「なつ！？」

——ノルンが避けた方から、ミストの剣が薙いできた。

速いっ！？

——ノルンは咄嗟に左手の盾で剣を受ける。

「グッ！……？」

「一体」と飛ばされた。

「今まで決ましたと思いましたよ」

——ミストはノルンが立ち上がるのを待つた。

なんて力だよ……。

……それに俺が立つのを待つた？

——ノルンはミストの顔を見る。

「楽しいです、もっと楽しみましょう」

俺をなめているわけではない……

……こいつは……純粋に勝ちたいんだ……

倒れている相手に剣をむけるのではなく……相手にけやんと負けを認めさせる形で勝ちたいんだ。

「ありがとう」

——ノルンは一言だけ告げ、再開を求めた。

——ミストは剣を正面に片手で構え、ノルンに突進しながら魔法を唱えた。

「遍く雷の精達よ（ルティンズ ヴ トンネレ）、我の目の前をほとばしれ（トウフイレズ ア ラグメント モ トレ ダ デヴ アント）」

移動しながら、詠唱も出来るのかよ！？

——移動中の詠唱は簡単には出来ない。2つの行動を一度にするのと同じだ。

——前方の広範囲に雷をまき散らす呪文だ。

……この雷は田隠し。剣に集中……

——そう判断し、ノルンは雷は食らった。ほほダメージはない。

——予想通り雷にはあまり魔力を込められていなかつた。移動しながらの詠唱なので魔力を込めきれなかつたのだろう。

シユツ

——剣が縦に振るわれる。

——避けると同時にミストに向けて剣を薙ぐ。

……つよいな。これでもきまらないだろ？

——ミストは肘の鎧で剣を受けける。力の差がありすぎて、軽々と受けられた。

「つー？」

まだだ！！

——ノルンは剣を受けられた状態から、盾を前にし、体当たりを試みた。

「きやつ…」

… もう飛ばされたお返しだ。

——先ほどのはノルンほど飛ばなかつた。

——いつものノルンならこんなことはしなかつただろう。

——ノルンもミストの起き上がるのを待つた。

「… ありがと…」

——ミストはすぐに起き上がり、構え直した。

楽しい…。次はどんな動きするんだ！？

——ノルンはいつも以上に楽しんでいた。

「君、強いな」

「まあね」

——まだ何手かしか剣をまじ合わせていないが、相手のことを理解できた気がした。

「… 次は何を見せてくれるんだ？」

「…? …… とつておきをね」

——ノルンは挑発的に訊いた。ミストは驚いたが、先ほどとは違い正面に両手で刀を構えた。

… さつきとは構えが違う。魔法が使いづらい構えだ。

——魔法を使う際には手で魔法を操ることが多い。意思だけで魔法

を使うのは難しい。

……今までの攻撃で、魔法はただのおとり。決めは剣……
純粹な剣術！！

——ノルンは次の行動を予測した。

シユツ！！

——ただただ速く縦に剣が振るわれた。

……速いが、ただの振り下ろし？
まさか……！？

——ノルンは避けた。次の攻撃を読んで……

——その瞬間、剣筋が曲がった。再び剣がノルンを襲う。

「えっ！？」

——声が上がった。

——ただし、ノルンの声ではなく、ミストの声だつた。

——ノルンは剣筋が曲がることを読んで、あらかじめしゃがんで避けていた。

——そのままノルンは突きへうつった。

「……負けました」

「闘技終了、勝者ノルン君」

——ミストは負けを認めた。

——見学していた生徒は言葉を失っている。時間にしては十分もな

かつただろう。

……ふう。

最後の攻撃……本で読んだことがあったのでわかつたが……実際に見たのは初めてだ……

——ミストが近づいてきて

「ありがとうございます、完敗でした。楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかった」

——まだ彼女の瞳は綺麗に輝いてる。ノルンは彼女の次の言葉がわかつた。なので先に

「次も負けない」

「！？次は私が勝ちます！！」

——さつきの闘技で気になる点があつた。近くにいる教授にも聞こえない声で彼女に聞いてみた。

「ねえ、ミスト……あ、ミストって呼んで良いかな？」

「何かな？ ノルン」

「君、——異能持つてないよね？」

決闘（後書き）

ちょっと戦闘描写が長くなりましたが^_^

感想・評価いただけますと、歌って喜びます

次はミスト視点

負け、そして…（前書き）

ミスト視点です^_^

負け、そして…

ああ、私負けたんだ…

——ミストは首に剣を突きつけられていた。

「…負けました」

「闘技終了、勝者ノルン君」

負けた……でも、楽しかった。

——ミストはノルンに近づいた

ノルン君かあ…力弱いし、動きも速くないし、魔法も使えないのか
な?
でも…
すごいなあ…

「ありがとうございます、完敗でした。楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかった」

…また戦いたい

「次も負けない」

「！？次は私が勝ちます！…」

——ノルンにはミストの気持ちが見えているようだった

「ねえ、ミスト…あ、ミストって呼んで良いかな？」

ドキッ…

——//ストは名前を呼ばれ心が騒いだ。

——//ストは返事の代わりに…

「なにかな？ ノルン」

——次の言葉で、またミストの心が騒ぐ。

「君、戦う異能持つてないよね？」

…戦う異能？

なんのことだね？…？

「…そうだよ」

「後でいいかな？」

——それだけ言って、ミストの答えを聞かず、見学していたみんなの元に行つた。

——その後、みんなに囮まされたがよく覚えていない。

———昼休み———

——//ストとノルンは屋上に来ていた。

「今日の決闘ありがとな」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「うーん……敬語はなしにしない？」

「うん、ありがとう」

——ノルンは手すりにもたれた。

「ミストは強いね。最後読めてなかつたら負けてた」

私のとつておき..

読まれたのは初めて…

「なぜ読めたのですか？」

「敬語」

「すみません、なぜ読めたの？」

「あの技、本で読んだことあつたから」

本に載つてるの？

ちよつヒシヨック…

——あの技はミストが苦労して自分で編み出した技だつた。

でも、もしかしたら…

「ねえ、その本なんて本？」

「ええと、たしか……『剣術上書』かな。図書館にあるから今度行つてみなよ」

「うん。ありがとーー！」

今度見に行こ…

あつ…

——ミストはノルンに呼び出されたことをおもいだした。

「すみません！…あの何の話ですか？」
「敬語……、相談あるんだけど良いかな？」

相談？

「すみませんつ、はい、いいよ。」

——ノルンは苦笑している。

「謝つてばっかり」

「あう…」

「ミストつてフランベルジH使つてるよね？ ビリしてあの剣にしたの？」

「うーん、難しい質問だね…」

——ノルンは何かを考えている。
なんでだろう？
たしか…

「インスピレーション」

「え？」

「武器屋の模擬剣で『これ！』つてのがフランベルジHだったの」

「……」

「あの…ノルンは、剣を探してるの？」
「ああ、ずっと持つパートナーをね」

「私に勝つた人…」

「でも、まだまだ強くなろうとしている。」

「なら、こんな剣を試してみよつよへ 探すの手伝つかう。」

「わざわざ、すいこなあ… ノルンは。

——ノルンの力になりたい、そつ//ストは願つた。

「いいの?」

「うん。……ねえ、よかつたら——」

——//ストは笑顔で

「——ともだちにならひ」

「わざわつた…

きつと、わたし…顔真つ赤だ…

ノルンも変に思つてゐる…よね…?

「うん、友達になつてよ」

——ノルンも笑顔で即答した。

……えつ…?

「だから、友達になつてよ。俺もおひと想つたんだ

——わざわざノルンの優しさだらう。

「あつがとね」

… 言えてよかつた

「ねえ、今日の放課後あいてる?」

負け、そして…（後書き）

ちゅうと更新おくれましたT_T

感想、評価、アドバイス、歌って踊って書ぎます

『ともだちになろう』

これをどうしても入れたかったです^_^

親友（前書き）

ノルン視点に戻ります。

「ねえ、今日の放課後空いてる？……見せたい所あるんだけ？」

——ノルンには「」の町で見せたい所があった。

——「ストは嬉しそうに

「空いてるよ」

——放課後——

——ノルンはミストと町へ繰り出した。

——「ストはノルンに学院のことや町のことを見ていこうね」ノルンは店の前で立ち止まつた。

「「」の店……「」……『ノルン』？」

——「ストは田の前の店の名を読み上げた。

「どうあたははこつてみてよ」

「うん……」

——「ストは恐る恐るドアを開いた

「「」しゃー、とおかえり」

「…？ おかえり？」

——「ストはノルンに『どうぞ』と話してくる。

「あら、ノルン、おかえりなさい。女の子連れてくるなんて初めてじゃない？」

「ここ、俺の家なんだ」

「あ、そりなんだ…」

——ミストは納得いったようだが、どうして良いのかわからないのか店を見渡している。

——ミストとノルンがカウンターに着くと

「よお、ノルン。その子が噂の子か？」

「あ、アル来てたんだ。噂の子かはわからないけど、編入生だよ。ミスト、適当に注文しなよ」

「そうそう、ノルンの友達なら全部サービスするよ
「おじさん、俺そんなにサービスされてないですよ
「ノルンがお前を抜かしたらサービスしてやるよ」
「それなら、サービスいらないね」

——アルはノルンの幼いときからの親友だ。学年ランキング1位の件の人である。

「あらら、ノルン。紹介してくれるかしら」

「ああ…、今日編入してきた、ミスト・ホールさん」

「ミストです、よろしくお願ひします」

——ペコリと、ミストは頭を下げた。

「俺はここの中、マーク・カリー・ミア、ノルンの父親だ。よろしく、ホールさん」

「私、ミーナ・W・カリー・ミア、ノルンの母親よ。よろしくね、ミ

ストちゃん

「W……？」

「Wは、私の故郷の名残なの。友達感覚でミーナって呼んでね、あつ、お母様でもいいわよ」

母さん……

「ええと……ミーナ、マークさん、カルボナーラお願いしても良いですか？」

「はいよ」

——そう言つて、マークは厨房に向かつた。

「アルも挨拶しなよ」

「ああ、アル、ヴァ・トートだ。魔術専攻クラスで二年次、ちなみにノルンより俺の方が強いぜ」

「ノルンより……！？」

「ああ、まだ一度も負けたことないね」

「アル、ひどいなあ。……事実だけどねえ」

「ははは。ミストさんだけ？ ノルンにぼくぼくにされた子だよな？」

「「……ぼくぼく？」」

あ、ミストと被つた……

「ノルン、あなた、こんなかわいい子に何したのー？」

——ミーナがすぐさま怒つてくる。

「違うよ、母さん、ただ決闘で戦つただけだよ。アルもおもしろが

つて…」

「噂では、そり聽きいたけど? わざわざこれ見る?」

あつ、アル…

——//ミーナは声を低めに…

「……おばさん?」

「おつと……ミーナさん、これ見る?」

——アルヴァは本の形をした物を取り出した。

「それって、MAGICROM?」

「MAGICROMって?」

——//ストは知らな「よつだ。ノルンは//ストに説明を始めた。

「MAGICROMは、魔術を使って立体的な動画を録画・再生する物だよ」

「ほへえ~、すご~いね。もしかして、私とノルンの決闘のですか?」

「そ、朝の決闘のMAGICROM」

「見たいです」

アルヴァには敬語なんだ…

「はい、カルボナーラ」

——戻ってきたマークとミーナ、ノルン、カルボナーラを食べている//スト、アルヴァでMAGICROMを囲んで見た。

——見終わつて、皆各自感想をいい始めた。

「ミストちゃん強いのね！」

「さすが俺の息子。エールさんもなかなかやる」

「ミストさんの最後の技…俺には……」

アル、また考へてるな…

——アルヴァはいい戦いを見ると、自分ならどう戦つか考へる癖がある。十分くらいかえつてこない。

「ホールさん最後の技は、自分で編み出したの？」
「はい、でもまだ未完成です」

え！？あれって自分で！？
それに…未完成って…

「あの技はその剣には向いていないね。ちよつと重すがる」

「！？…はい、でも…なぜ？」

「父さんは昔、腕のいい鍛冶師だつたんだ」「鍛えるか、剣を変えた方がいいだろ？」「あなた、もう鍛冶師じやないんだから…」

——マークは剣の話すると多弁になる。
——その度に、ミーナは悲しそうだ。

「ああ、そうだな…わるかつたね、ホールさん」「いえ、ありがとうございます」

「ミストちゃんはいつこの町にきたの？」

「昨日の夜、着いたとこだよ」

母さんには敬語じゃない？

男と話すの慣れてないんかなあ……？

「じゃあ、あれ見てないのよね？」

「うん、これから、あれ見に行くつもり」

「あれって？」

「うーん、着いてからのお楽しみ」

——わかつていなのはミストだけのよつだ。
——ちなみにアルヴァはまだ頭の中でミストと戦つてゐるよつだ。

「じゃあ、そろそろ行つた方がいいかもね」

「そうだね、じゃあ、ミスト行こいつか」

「あ、はい。ご飯ありがとうございました。おいしかつたです」

「ああ、いつでも来なよ」

「またいらつしゃいね」

親友（後書き）

投稿～頑張りました^ ^

このまま毎日投稿したいです

小説書いてストーリー以外で一番悩むのがタイトルとサブタイト

ルTーT

次はキャラの名前TーT

感想とかくれたら泣いて喜びます

歓迎

「ノルン、どこ行くの？」

「ミストに見せたい所」

「『ノルン』じゃなかつたの？」

——ミストは『ノルン』を出てから、ノルンに引っ張られ少し走っていた。

「違う……っと、間に合つたかな」

——ノルンは足を止めた。

——そこは町にはいる門のある広場だ。

「……？」

「うん、そろそろ……」

——日が沈みそうな位暗くなっていた。

「ねえ、ミストはこの町が何で首都かわかる？」「国の真ん中にあるから？」

——ミーラル共和国の首都ミールは、ほぼ共和国の中心にある。——しかし、ミールは大きい都市ではない、大きな町という表現の方が正しいだろう。それに、首都とはいっても、政治、軍事の中心は別の都市にある。唯一あるのがミール学院だ。

——首都である理由は……

『うたえ、せかい。うたえ、うんめい』

「…何か聴こえる?」

——いや、聴こえてない、心に響こてる。

——優しい声だ。

——ノルンは答えを喰つた。

『「ここは、せいれいにしゅくふくされしばしょ』』

『せいれい』「わたし」『は、あなたをこばまない』

『「わあ、かんげいしょ!」あなたを』』

——ただただミストは聴き惚れていた。

——ノルンは足を着き、手をミストに差し出した。

『「わあ、てをつなぎあゆむ!」』

「手を取つて」

「…うん」

——ミストが手を取ると、一人を光が纏う。

——その光が空へ飛ぶ。

——そして、光は町中にはじか、色を様々に変え降つてくる。

「きれー…」

——ミストは空を見上げてこる。

——光がすべて消えるまで——

「いまのは?」

『『精靈の歓迎』、この町がミストを歓迎したんだ』

「…歓迎」

「イリは精靈に愛された町ミール。この町によつて、ミスト」

——ミール、精靈から祝福された町。日が沈む時、精靈の歌が歌われる。

——人が精靈の歌に合わせ、人を歓迎した時に起る奇跡、『精靈の歓迎』。

「——ありがとう、ノルン」

——ミストはまだ空を見上げている。消えた光を見ている。

：喜んでもらえたかな？

——精靈の歓迎後——

「ミストって寮だよね？ 送るよ」

——ミストは頷き、ノルンの横によつてきた。

——どれくらい歩いたどうか。ただただ静かに歩き続けた。

「…今日はありがとうね」

「いいよ」

「ありがとう」

「お礼言い過ぎ」

——ノルンは少し照れている。照れ隠しに…

「どれに対してもありがとうなのかな？」

「戦ってくれたこと、友達になつてくれたこと、素敵な歓迎してくれたこと、全部だよ」

…ますます照れる

「ノルンにあえて良かつた…。明日から武器探ししよ?」

——ミストも照れてるのか、すぐ話を変えた。

「ああ、よろしく頼むな」

「うん!…あつ、寮だ。じゃあ、また明日ね」

「じゃあ、また明日」

——手を振つて別れた。

歓迎（後書き）

「アプロメパートになりました^ ^

次はちょっと話とぶかな？（^ ^；

感想と評価お願いします^ ^

店の名のノルンは『ノルン』と表記します。

この世界での精霊は、神様みたいなもの

ノルンの剣（前書き）

— 田村ももした —

ノルンの剣

——ミストが編入してきて半月が経つた。

シユツ

——ノルンの剣がミストの喉元に突きつけられる。

「……ふう。今日も俺の勝ちだな」

「…また負けた~」

——人はノルンに合つ剣を探していた。

——学校の剣をかり、毎日ミストと試合をしている。

——もう五十本くらい試しただろう。それでも、ノルンはミストに一度も負けていない。

「この剣もだめだな」

「この学院にもう剣ないの?」

「もう、全部試したのか…。……じゃあ、剣屋でも行くか

「剣屋つてこの町にあるの? 私も行きたい」

「」の後、行こうか

——練習後——

——人は町の端にある刃物屋に来ていた。

「」の刃物屋じゃないの?」

「まあまあ、入るよ」

——ノルンは先に入つて行つた、その後にミストが続いて入つた。

「おじちゃん、こんにちは」

「お邪魔します」

「おお、ノルン坊、久しぶりだね」

——優しそうなおじさんがノルンを出迎えた。

——おじさんは子供に言つようじに優しく

「今日はお使いかい？」

「いや、今日は奥に」

「おお、それはそれは。後ろのお嬢さんもかい？」

「……はい」

——//ストは分からぬだつたが、空氣を読んだみたいだ。

「二人とも付いてきな」

「……ねえ、ノルン。そろそろ説明して欲しいんだけど……」

「ああ……、ここはうちの店がお世話になつてゐる刃物屋で、奥で剣も扱つてゐるんだ」

——おじさんは奥の扉を開いた。

「さあ、入つて」

「えつ……？」

……久しぶりだ。また増えたなあ……

——そこには部屋いつぱいに、剣がおかれていた。

「……これ、何本あるんですか？」

「何本だったかな、千は超えてる。さて、ノルン坊と可愛いお嬢さんは何の用かね？」

「今日は剣を見せて欲しいんだ」

「私は……ちょっと剣を見てくださいますか……？」

ミストの剣、調子悪いんだもうか……？

「ああ、見てみよう。ノルン坊は勝手に見回してくれて結構だ」
「ありがとう」

「いやあ、懐かしいね。ノルン坊は小さな頃に、*「*に通つていて
ね、剣のことによく訊いてきたんだよ」

「ノルンは昔から変わってないんですね」

「まう、これは是非、ノルン坊の今を聞きたいね。まあ、お嬢さん
の剣を見ようか」

——なでしこ、ミストとおじさんはこうしたこと話をしている。

そ、俺は剣を見回るうか……

まずは、昔なかつた剣から……

「*「*の剣は……」

「フランベルジュでもつと軽い物はありませんか？」

「……ないね。それよりも、*「*の剣は泣いている」

「泣いている？」

「お嬢さん、あなたにこの剣はあつてないね」

「……どうすることですか？」

「*「*の剣ひとつてあなたは強すぎる、剣が悲鳴をあげている」

——ミストのあの技に剣がついていないのだろう。
——ノルンは剣を見ながら、話を聞いていた。

「ノルンには、お嬢さんに合ひう剣はないね。それはノルン坊にもいえ
る」とだらうけどね」

——ミストはただただ自分の剣を見つめた。

「ノルンの剣。」

——ノルンは一つの剣に強く心が引かれた。

——その剣を手にする

「……？」

——まだこの剣で戦っていない。しかし、ノルンは確信した。

「おじさん、これは！？」

「ああ、それは戦えない剣じゃよ。ワース王国の王室の剣のレプリ
カ。もとの王室の剣は、もちろん使えるがね。それを打つた鍛冶師
には腕が足りなかつたのだろう、それは非常に脆く、すぐ折れてしまつ。戦える剣は最高級の鍛冶師じゃないと作れないだろう」

——レイピアの形状に似ていた、ただ剣身がレイピアのように細い
のだが、突きに特化しているのではなく切ることに特化させた剣だ。
細身なのに、鋭い刃である。

——ただただノルンの手に馴染んだ。

「ノルン、それにするの？」

「ああ、これだ。おじさんありがとう、鍛冶師には当てがあるんだ。」

この剣借りて行くよ

「ああ、持つて行ってくれ。剣が完成したら、是非見せてきておくれよ」

「はい、行こうかミスト

「ちょっとノルン！？お邪魔しました」

——ノルンはミストの手を引いて、店を飛び出して行つた。

ノルンの剣（後書き）

毎日更新はきついです。<>

更新がとぎれとぎれになるかも……ご容赦を……m——m

感想、評価を待っています

試合と闘技、決闘の違いについて

試合：生徒が勝手に行う

闘技：教授立ち会いの基の真剣勝負

ランキングに関係する

決闘：教授立ち会いの基の真剣勝負

ランキングに関係しないが、

本人達のプライドを掛けて戦う

重要度は、試合 > 闘技 > 決闘 です

剣屋けやとしたのは（けんや）って表現がなんだか嫌いだつたからです。
他意はありません^ ^；

ミストの剣（前書き）

ミスト視点です

///ストの剣

——人は『ノルン』に着いた。

「ただいま」「お邪魔します」

「おかえり、今日は遅かったわね」

——///ストとノルンは剣探しの後、いつも『ノルン』へよっていった。

剣も見つかったし、今日でおわりなのかな…

「刃物屋行つてたんだ、剣見つけたよ」

「おお、やつと見つけたか。どんな剣だ?」

——マークは店の奥から出てきた。
——ノルンは借りてきた剣を出した。

「これは…。うーむ、難しいな」

「…父さんでも、無理かな?」

「どんなの? 私にも見せてよ、…………えつー?」

///ーナ…?

——///ーナはノルンの持ってきた剣を見て驚いている。

「……ノルン、本当にこれにするの?」

「うん、これに決めた」

「///ーナ知ってるの?」

「ええ、ちょっとね……」の剣はワーサリア、帝国のH剣よ

なぜ、ミーナ知ってるの…？

——//ストはミーナが王国出身だと知らない。

「ワーサリア…」

——ノルンは剣を見ながら復唱した。

「そりが、ミーナ良いんだな？」

「…ええ。ノルンが決めたことですもの」

「わかった。しかし、ノルン、この剣は時間がかかるぞ」

「いいよ。最高の剣をお願い」

「ああ、任せろ。Hールさんもありがとう、ノルンにつきあってくれて」

「いえ、そんな…」

…本当はもつと付き合いたい

「……Hールさん、剣は何の為にあると想ひ？？」

！？…剣は何のため？？

——マークは唐突にミストに質問をした。

——//ストは突然の質問にすぐ答えれなかつた、マークは問い合わせる。

「君は何に剣を使いたい？」

——マークは真剣にミストの目を見ている。

私は……私の剣は……

「……勝ちたい人がいます。勝つて、取り戻したい物があります
「その人に勝てたら、その人をどうする？ その後はどうする？」

——マークはいつになく厳しく問う。

「私は何があつても人を殺しません。その後は力を持たない人を守
りたい」

「……」

——マークはまだミストの目を見ている。

「……よし、合格だ」

——マークはいつものやさしさに戻り、カウンターの下から長い
包みを出してきた。

「エールさん、これを受け取ってくれ。ノルンと仲良くなってくれて
いるお礼だ」

「……これは？」

——ミストは包みを解いた。

——ノルンとミーナは横で見守っている。

——そこには

「フランベルジュ」

「正しくは、フランベルク、フランベルジュの片手剣だ」

——ミストが今使っている物よりも、少し短い。魔導石も柄も部分に埋め込まれている。

——剣身にはフランベルジュにはない紋が纖細に表されていた。

「これを私に？」

「ああ、俺の最高の技術で作った最高のフランベルクだ。使ってくれるかな？」

「ミストちゃん、この人はノルンと仲良くしただけでは剣を打たない、認めた人にしか剣を託さない。私もあなたにこの人の剣を使って欲しいの」

——ミストは手に持つてみる。

……今使っているフランベルジュより、とても軽いし、手に馴染む。

「こんな良い剣……、いいんですか！？」

「この剣は君の為に打つたんだ。きっと君はこれで強くなれる」

強くなれる……

——ノルンに勝てないことでミストは伸び悩んでいた。

……あの人には勝つ為にもっと強くなる……

「ありがとうございます！」

ベストの剣（後書き）

心情描寫^{あわめ}にしてみました。< >
感想、評価をお待ちしています

ミストの実力、次の壁（前書き）

ノルン視点に戻ります。

ミストの実力、次の壁

―――― 鬥技――――

……ふう。

――今田もノルンは勝つた。

――次はミストと学年3位の娘の鬪技だ。

「鬪技開始！」

――ミストは昨日受け取った剣を使つている。

あの剣……ミストはどう強くなるのか…見物だな。

3位が相手なら、てこずるだらうな…

あの剣のミストの強さをはかってやる！

――ノルンはいざまた戦うライバルとの戦いを考えていた。

シユツ

えつ！？

「えつ！？……負けました」

――ミストのやつたことは単純だつた。

――ただの一瞬。相手に詰め寄り、剣を突きつけただけだ。

――ただただ恐ろしい速さで…

……なんだあの速さ！？

「……勝者、ミストさん、ランキング3位へ」

——審判も驚き、反応が遅れた。

——戦い終わってノルンが近づいてきた。

「ノルン、見えた？」

「ああ……ぎりぎりな。あの速さは？？」

「この剣もつてみてよ

——ミストはあの剣を渡した。

「えつ！？」

……信じられない。

——剣はある程度の重さがある。

——しかし、マークが作った剣は重さを感じなかつた。

「この剣ならノルンに勝てるかも

「……俺は負けない」

——そう言つて、剣をミストに返した。

……実際に戦つたら、どうだろ？

ただ次、戦つ時は……

「次は本氣で」

――放課後――

「よお、」二人

――人は帰ろうとしていると、アルヴァに声をかけられた。

「あ、アル」「こんにちは」

「ミストさん、掲示板見ました？」

……相変わらず敬語どうしだな

――ミストとアルヴァはお互い敬語だ。

――掲示板には主に闘技関係のことが張り出される。

――ランキングや闘技日程などだ。

「まだ見てないです」

「じゃあ、帰りに見てくるといいよ」

「はい」

「じゃあな、ノルン、ミストさん」

……アル、なんだか気合いが入ってる？

――アルヴァは足早に去つて行った。

――人は掲示板を見に来た。

「あつ、ノルン。明後日の日程、発表されてるよ
「本當だ、俺は誰とだ？」

……俺は今日のミストの相手か

——学年ランディング4位の人だ。（ミストに負けて、3位から4位に下がった）

……今日の戦いと比べられるな。
絶対に負けられない！

「ミストは？」

「……」

——ノルンはミストの名を探した

……あつた。

アルヴァ・トート VS ミスト・エール

「アルヴァさんと…」

「アルとか……」

——アルヴァは依然として1位に居座っている。

だから、アルあんなに気合に入つていたんだ……

——掲示板見てから、二人は無言で帰り道歩いていた。

「……」

「……」

ミストとアルの戦いか

「……ねえ、ノルン」

「うん?」

「ノルンはアルヴァさんと戦つたことは?」

「試合なら何度も、闘技はまだないね」

「本当にノルンは勝つたことないの?」

「ああ……」

……ただ一度も勝てなかつた。

俺の一番勝ちたい相手……

「戦い方は訊かない、私は実力で勝ちたい」

ミストらしいな。

——まだ半年だが、お互い性格はわかっていた。

「じゃあ、一つだけ」

「なあに?」

「アルは、異能持ちだ。『魔法制御』の異能」

——皆の知つてゐる情報だつた。

「異能持ち……」

……ミストも異能持ちだつて言つていたなあ
うん? ミストの異能つてなんだ? まあ、次の戦いで見られるか
もな……

——ノルンはまだミストの異能を知らなかつた。

「アルは強いよ」

「うん、でも、私が勝つ——！」

ミストの実力、次の壁（後書き）

がんばりましたへへ

そろそろ毎日更新はきついです…

感想、評価待っています。

ランキングは、順位が低い者が勝つた場合、順位が高い者の順位になる。

天使のような少女（前書き）

新キャラ登場です

天使のよくな少女

明日かあ

――3位と1位の戦いの前の日。

――学院が終わって、ハルンは一人で帰ってました――は、『今日は集中力がいい、元気

ミスト、緊張してゐな
うつむが勝つのかな
?

「ナニカ! ?」

——ノルンは考へごとをしてゐると、小さな少女にぶつかつた。

「あつ、じ」ねん

――少女に手を差し伸べる。

……天使？

——少女は異形だった。背中に純白な羽、小さな体に見合った可愛らしい翼だ。

——目は金色、髪は金髪、人形のような娘だ。

——異形であるのは特に珍しくない。代表的な異形は承た
——しかし、ノルンは少女のような純白な羽は見たことがない。

「ありがとうございます。あれ……？」

——少女はノルンの顔をまじまじと見ている。

「あの……町、案内してもらひませんか？」

「え……？」

人懐っこい子なのか……？

町の案内？ 旅の子？ こんな小さい子が一人で？

——ノルンはいくつも疑問を持ったが、

今日は予定ないし、いいか、それに……

こんな小さな子を一人にするのは忍びない……

「あの……、ダメでしようか？」

「いいよ、俺はノルン・カリー・ニア。君は？」

「アリシエル・ダ……ルラー。アリシエル・ルラーです。アシルってよんぐください」

アシルか……アリ、アリシはおかしいもんな。

——ノルンはどうでも良いことを考えていた。

「よろしく、アシル。どこから案内しようか？ 行きたい所ある？」

「カリー・ニアさんに任せます」

「ノルンって呼んでよ」

——ノルンは名字で呼ばれることを避けていた。店で名字で呼ばれると誰か区別がつかないからだ。

「はい、ノルンさん」

「じゃあ、公園とか回ってみよつか」「はい、あの……手にぎりてもいいですか？」

慣れない町で不安なのかな……？

「いいよ」

——ノルンは子供の多い場所を選んで回るといつて、手を繋がれて始めた。

「アシルは一人でこの町に？」

「いえ、ご……お母様ときました」

「ひとりで町歩いたら危ないよ？」

——アシルは笑顔で

「一人じゃありません、ノルンさんと歩いてますから」

——アシルの笑顔は可愛かつた。

——その後、ノルンは町を案内した。

——どうやら、アシルは前住んでいた所が良い状況ではなかつたらしく、この町に避難してきたようだ。

——当分この町に滞在するらしい。

——アシルはしつかりしている。

——ノルンは最後に『ゾロッ』に来ていた。

「おかえり」「おかえり……つと、いらっしゃい」

「ただいま」

「「」ノルンさんのおうちですか？」

「そうだよ。父さん、アイス一つ」

「ノルン、今度はそんな小さな女の子連れてきて…」

「最近人付き合いよくなつたな。はい、アイス」

——ノルンはマークからアイスを受け取つた。

——ノルンはあまり人付き合いが良い方ではない。

——今でも友達と呼べるのはミストとアルヴァだけだ。

「はい、アシル。これは僕からのプレゼント」

「ありがとう、ノルンさん」

「アシル……？」

うん?……ああ、紹介してなかつた

「父さん、母さん。」の子は、アリシエル。町で知り合つたんだ
「よろしくお願ひします」

——アシルはかわいらしく頭を下げた。

「アリシエル……ま…かちが…ね……」

——ミーナは小声で、なにかつぶやいていたが、すぐにいつものミーナに戻り

「ノルンの母親のミーナです、よろしくね、アシルちゃん」
「父のマークだ。よろしくな。ノルンの知り合いならサービスする
から寄りなよ」

「はい、ありがとう」ゼコます

この店、つぶれないだろ？

——ノルンは店を心配した……。

——アシルはいくつかアイスを食べ終わった頃には暗くなっていたので、ノルンはアシルを送り届けた。

——綺麗なアパートの前でアシルは

「あ、ここです。今日はありがとうございました」

「ああ、いいよ。じゃあ、またね」

「はい、またです」

——アシルと別れた。

——ノルンは夜道を歩きながら、伸びをし

うーん、良いリラックスになった。
さ、明日は闘技だ。

天使のよつな少女（後書き）

今回、場面移動が多かつたですへへ；

感想、評価待ち続けています

アシルは意外と重要人物かも？

「闘技開始」

——少女は魔法を唱え始めた。

「火よ（フュウ）、行け（エトラン）」

——炎の初級魔法。簡単なほど威力が弱く、詠唱が短い。

——魔法が少年に撃たれた。

——少年は簡単に避けるが、少女は続けて魔法を唱えた。

……続けて詠唱か。

——ノルンの闘技。闘技相手は魔法専攻の少女、学年4位だ。

——ノルンは剣に加え、短剣を一つ腰に添えている。

——これはノルンの魔法専攻と戦うときの装備だ。

「水よ（ヒアウ）、覆え（コオウズレ）」

——まだ続ける。

「雷よ（トンネレ）、鳴け（アペレ）」

レイト魔法……？

——レイト魔法、呪文だけ唱え、魔力を込めないことで魔法の発動を送らせる。

——それだけなら簡単だが、その状態での詠唱は高度な技術が必要

だ。

——いくつのも呪文の後、一気に魔力を込める」とで一気に魔法を発動できる。

「土よ（ソレ）、掘め（アトラペーレ）」

三つも……す”いな、でも…

——水は周りから、雷は田の前から、土は下から、一気にノルンを襲う。

——ノルンは一步横へ

——水の魔法だけは避けられなかつた…

「グッ…」

なかなかの威力だ…でも…

あんな魔法の後、すぐにはう”いけないだろ?

シユツ…

——ノルンはすかさず、短剣を投げた。

——短剣は相手の首をかすめた。

——相手はもし数センチずれていたら、とを考えたのだろうか、顔が蒼白になり

「…負けました」

「闘技終了、勝者ノルン」

……ふう。ちょっと痛かったな…

——1発ずつ撃たれたら、ノルンも苦戦したかもしれない。

——ノルンは普段なら一撃も受けることはなく、時間をかけて確實に勝利しただろ？

——前のミストの試合を思い出し、一手で勝ちたかったのだ。

さ、次はある二人の戦いだ。

——闘技の順は、注目度の高い戦いが後に回される。よつて、次は最後の闘技。

「次、アルヴァ・トート対ミスト・エール、両者前へ！」

「「はい！」」

二人とも気合いたつぱりだな……

「両者！ 魔法、武術、知略、全てを駆使し全力で臨み勝利を得なさい。手を抜くことは相手への侮辱です。では、両者、よろしいでしょうか？」

「「はい！ よろしくお願ひします」」

「闘技開始！」

——二人の対決が始まつたが、アルヴァは構えていない：

「やあ、ミストさん。本気でいくぜ」

「……勝たしていただきます」

——ミストは返答したが攻撃にはつづらない。

ミストらしいな……。

——相手が構えてから戦う、それがミストの信念だ。
——決して、無防備な相手には攻撃しない。

「さあ、やろうか」

——アルヴァは構え、魔法を唱え始めた。

「火よ（フュウ）、水よ（エアウ）、雷よ（トントレ）、木よ（アベレ）、土よ（ソレ）、漂え（ジエ デリヴ）」

いきなり……あれか……
アルだけの魔法……

——ノルンは何度もアルヴァと戦っている。アルヴァの魔法は知っていた。

——宙に、火、水、雷、地に、木、土が輝いていくつも現れた。しかし、動かない。

——つまり地雷だ。

ミスト、動けなくなつたな……

「さあ、どうする？ ミストさん」

シュバッ……

「……？」

え！？ 魔法を切つた……？

——ミストは地雷を切つた。つまり、魔法を切つた。

——普通、魔法は切れない。魔法、魔力の固まりは非常に固い。それも、アルヴァの魔法なら格別に……

——それをミストは紙を切り裂くように、スパッと切つた。そのままアルヴァに近づく。

——アルヴァは急ぎ魔法を唱え始めた。

「水よ（ハウ）、覆（コオウ）……」

「……遅いです」

——アルヴァは詠唱の途中に攻撃され、避けたが……

——ミストは剣筋を曲げ

「私の勝ちです」

シユツ……

——ミストの剣がアルヴァを襲う。

1位～3位（後書き）

ノルンの戦いが少ない気がして、入れてみました^_^
感想評価お待ちしています。

1位の実力（前書き）

ミスト視点です

1位の実力

「…私の勝ちです」

シユツ…

——ミストの剣はアルヴァを襲う。

グッ…

！？…なんで？

——ミストの剣が止まった。

——剣はアルヴァの首で止まっているのではない。

——アルヴァの肩の上、宙で不自然に止まっている。

これ以上振り切れない…！？

「これは切れないのか。火よ（フエウ）」

——アルヴァは短い呪文を詠唱した。

——その呪文には呼びかけしか与えられていない。

——呪文は呼びかけ（つまり、顕現する物）に指示（顕現した物への命令）で構成されることが多い。

——しかし、術者の魔力が届く範囲なら、呼びかけだけで、そこに顕現することができる。

ボツ…

——ミストの足に火がついた。

「うう…、水よ（エアウ）」

——魔法で火を消し、下がつた。

何か、壁みたいな物に防がれた…それなら…！

「遍く地の精達よ（ルテインズ ヴ ソル）、空に舞い我の敵を囲め（ジエ ダンセ ダンス レ シエル エスト カパブル アウター デ モテミ）」

…見えた。これはずるいね…。

——ミストは、土を相手の周りにまき散らす魔法を使った。本来は目くらましの魔法。

——アルヴァの周りには土煙が入っていない。アルヴァを囲む壁があるようだ。

でも…もしかしたら…

「見破るだけじゃ勝てないよ」

「火よ（フエウ）、行け（エトラン）」

——ミストは魔法を放つた。

——アルヴァに対してもなく、アルヴァの横の空間にだ。

——アルヴァは動かない。

——ミストの魔法は壁を通過した。

やつぱり…まだチャンスはある…！

「なるほどね、ノルンは勝てないね…」
「なかなかやるね、ミストさん」

物理的な物を防ぐ壁…、剣だけのノルンじゃ勝てないね…
でも、私は魔法が使える…！」

——ミストはアルヴァに向かつて駆けた。

「雷の精よ（エスピリット・ジ・トンネ）、我の剣に纏え（エス
ト・カパブル・ア・ダンス・ヒピヒ）！」

——剣に補助魔法をつけた。ミストの剣は雷を浴びていて。
——その剣でアルヴァを突く。

シユツ…バチツバチツ…

——剣はアルヴァの前で止まつたが、雷はそのままアルヴァへ向か
つた。

「おつと…ちょっとバチツときたな」

——アルヴァは軽く避ける。

私の攻撃が通る…！」

——まだ剣には雷が残っている。
——そのまま剣筋を曲げる。

シユツ…バチツ…

「くつ……！？」

——アルヴァはダメージを受け、膝をついた。

——ミストの剣は雷がなくなり、追撃が出来ない。

「まともに攻撃受けたのは久しぶりだよ……」

ゾッ…

——ミストに背筋が凍り付くような感覚が襲った。

——すぐにアルヴァから距離をあけた。

わざのアルヴァさんとは違つ……？

「ミストさん……ちょっと本氣を見せてあげる」

壁がなくなつた……？

——わずかに残つていた砂煙がアルヴァに触れる。

いまなら…

——ミストは相手へ駆け斬りつける。その間にアルヴァは呪文を

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な力で敵をはじけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

……聞いたことない呪文。でも、顯現より私の方が速い！！

ドンッ！？

——//ストの体に衝撃が走った。

……あれ？ なにが おき…………た…………

——モード//ストの意識が途絶えた

1位の実力（後書き）

前の続きなので、すこし短くなりました（^-^；

なんだかミスト視点多い気が…。

感想、評価待っています

感想戦・ダメ出し（前書き）

またまたミスト視点

感想戦・ダメ出し

「うう……」

「ミスト！？」

「お、目覚めたか」

——ミストはベットで横になつている。
——せばに、ノルンとアルヴァがいる。

「！」は……？」

「保健室だよ」

——ミストは悔しそうに

そつか……

「私、負けたんだ……」

「ああ。……もつと上で待つてるぞ」

——アルヴァはミストに『もつと強くなれ』と
——そして、去つて行つた。

「悔しいな……」

「ミスト……」

——放課後——

「勝ちたかったなあ……」

「……これでまたミストは強くなれる」

きっとノルンもアルヴァさんに負け続けて強くなつたんだ…

「うん……そうだね」「

あ、そうだ。蛭田、町で面白い予と会ったんだ。

——ノルンは気を使つたのか、話を変えた。

「どんな子?」

「すごくきれいな子だよ」

きれいな子……？

――ミストは怒りを感じた。

「ノルン」

「あ、ええと、もう誰のものいじやなくして……」

「ええと…ミストも綺麗だよ」

「えー？」

「あつてみたらわかる。今日うちよつてかない！？」

あつ、話を変えた

でも、綺麗

――人は『Norin』に着いた。

「ただいま」「お邪魔します」

「おかえり、昨日の子來てるよ」

「ノルンさん、さつそく来りやいました。今日はお母様もつれできました」

——小さい子がノルンに駆け寄つてくる。10歳くらいだらうか?
——ミストが一目その子を見て感じたのは

きれい……

「ミスト、この子がわいを言つた子、アリシエル。アシルつて呼んであげて。アシル、このお姉さんは学院の友達で、ミスト。」

——ノルンは一気に一人を紹介した。

「よろしくお願ひします。ミストお姉ちゃん」

「よろしくね、アシルちゃん」

「ノルンさん、ミストお姉ちゃん。この負けじ

あれ……? ミーナどうしたんだらう……?

——ミーナはカウンターの奥で浮かない顔をしていた。

——自己紹介が終わるとすぐ、アシルは一人を奥の方に呼んだ。

——そこには剣を携えている女性が居てた。

「あなたがノルンさんね。昨日はアシルがお世話になりました。私はエリアと申します、アシルの母親です」

「あ、はい。ノルンです。で、こつちが」「ミストです」

「エリアはね!…すつごくつよい剣士なのー!」

剣士なんだ……

どつついで…

——ヒリアはやせているが、服の上からでも鍛えられているのがわかる。

「さつきノルンさんとミストさんの戦い見せてもらいました。すばらしげ戦いでした。あなた達強いのね」

——『ノーナ』には、アルヴァからもらつた一人の決闘のMagiCROMをおいている。

「いえ、そんな…」

「ありがとうございます」

——一人の返事は対照的だった。謙遜したミスト、自信満々にいったノルン。

「あのヒリアさん、今日の戦いも見てくれますか?」

「ミスト…」

強い剣士の意見…

きつと参考になるよね

「それは是非見せて欲しいですね」

「私もノルンさんとミストお姉さんの戦いみたいですね~」

「俺にも見せてくれ。ミストさんが剣をどれほど使いこなせているかを」

元々そのつもり…

「はい。//一ナも見ない？」

「ええ……」

なんだか元気無い……？

——六人でMAGICROMを囲んで見た。

——MAGICROMには、ノルンの試合と//ストの試合が入っていた。

「ミストさん、ちゃんと使いこなせてるね」

マークさん……

「ありがとうございます！」

「ミストお姉ちゃんもノルンさんも強い～」

「ありがとね、アシルちゃん」

「ありがとう、アシル」

——Hリアは黙っている。

「あの……Hリアさん。どうでしたか？」

「ええ……、ミストさんの戦いは負けはしたけどすばらしかった」

「ありがとう」ざここます。あの……私には何が足りないんでしょうか？」

良い剣持つてる……
体も鍛え上げた……
魔法も結構使える……
でも、勝てない人がいる

なにが足りないんだろ？…？

——ミストはアルヴァに……いや、ノルンに負けてからはずつと考えていた。

「スタイル、もっと自分の戦い方を研究した方がいい。今のミストさんは教科書通りの動きを完璧に使っているだけだ。ミストさんは才能も実力もある、自分だけの戦い方を見つけたらもっと強くなれるよ」

スタイル

……
私だけの戦い方があ

「あの俺は？」

——ミストへのアドバイスが的確だと判断したのだろうか、ノルンもアドバイスして欲しそうだ。

「ノルンさん……今日の戦いは酷すぎる」

「！？」

「エリア！？ なんで！？」

ノルンの戦いが酷い……？

私は良かつたつて思う……

——ミーナは元気がなく口をはさまなかつた。

——マークにも思う所があるんだろうか、何も言わなかつた。

——エリアはアシルを無視する。

「あの……どこが酷かつたんですか？」

ノルン……ちよつと……怒つてゐる……？

「結果を見れば、圧勝だったね。でも、君はこんな戦いしていたらこれ以上強くなれない」

「なんで……なんですか！？俺は勝ちました！今はまだアルには勝てないけど、強くなつてゐる。ミストにも勝つてゐる……なのには……なんで！？」

——ノルンの言つてることは支離滅裂だ。

——普段、怒ることなんてほとんどない。

ノルン……

怒るのも当然だよね……

人一倍努力して、もっと努力してゐるのに、強くなれないって……

「わからないの？……わかりました、一手だけ教えてあげる」

感想戦・ダメ出し（後書き）

一日更新遅れましたT_T

感想・評価お待ちしていますv_v

壁（前書き）

ノルン視点にもどります。

「一手だけ教えてあげる」

——エリアはそう言い、ノルンに外へ出るよひ指示した。

俺は強くなれない？

あの戦い、そんなに悪かったか？

俺は勝った、それが結果だ！！

——ノルンにはあの戦いが悪かったとは思えない。

——ノルン、ミスト、アシル、エリアは公園に着いた。

——アシルはおどおど、ミストはわくわくしている。

——エリアは剣を構え、

「さあ、やりましようか」

——ノルンも剣を構え、頷いた。

シユツ

——すぐにエリアは攻撃してきた。ノルンは避け、すぐに反撃する。

強いな……

多分、勝てないだろう……
でも、ついていくてる……

——ヒリアの剣はそこまで速くなかった。

——手加減しているのだろうか、ノルンがぎりぎり対応できる速さで戦っている。

「あの戦い、君は勝つて当然と思っていたね？」

……負ける」となんて考えていなかつた

「……」

「勝つて満足？ 楽しかつた？」

「……」

——ノルンは答えない。

「あの戦いは勝つ為に戦つていたの？」

あつ……

——ノルンは気付いた。

強くなる為に戦つていたんだ……

あんな無理矢理な勝ち方……

あんな戦いしてたら……

強くなれない！！

「わかつたみたいだね。君とミストさんの戦いは楽しそうだつた。でも、あの戦いは勝つことだけを考えていたね？」

「はい……」

「戦いを楽しみなさい。それが私からの教え」

「……はい！」

——そのとき、ノルンの剣はエリアのほほをかすつた。

「今のはなかなか……じゃあ、もう一つ。君はなぜ強くなりたい?」

「……勝ちたい相手がいます」

「その相手に勝つたら?」

アルに勝つたら……?

そんなの考えたことなかつた……

「……わかりません」

「君は何の為に戦うの? その答えが出れば、君は強くなれる」

カキーン

——ノルンの剣は地面に突き刺さつた。

「一年後……本気で相手してあげる」

——ノルンを認めると……

——夜——

——あの後、ノルンはエリアとアシルとは別れ、ミストと『ノルン』に戻つた。

——帰ってきたノルンを見て、マークは『よく考える』と

——普段のの親ばかのマークからぬ厳しい言葉を送つた。

『よく考える』かあ……

何の為に戦う……

ミストは『力を持たない人を守りたい』って言つてたな……

俺は……

アルに勝つた後かあ……

——その時、ノルンはある決心をした。

壁（後書き）

今回はだいぶ短めですT_T

感想、評価待つてまーす^_^

決心

――次の日の朝――

――ノルンは珍しくアルヴァを訪ねた。

――人は屋上に着き

「で、ノルン、何のようだ?」

「今日は真剣な話なんだ」

「ほお~」

――ノルンはアルヴァを真剣な目で見据える。

「…」

――アルヴァはいつもと違うとわかつたようだ。

「…話してみる」

「ああ。…アルヴァは何の為に戦うんだ?」

「…答えにくい質問だな。強くなるためだ」

「じゃあ、何の為に強くなるんだ?」

「…」

…アルにもわからないのか?

「それをお前が俺に訊くかよ……」

――アルヴァは呆れている。

なんだ……？

「……？」

「お前に……ノルンに勝つ為だよ」

！？……俺に？

いつも俺が負けているのに……？

「……俺はアルに勝つたことないだ？」

「……本気のお前に勝ちたい」

「俺が本気じやない？」

「……ああ、俺が気付いてないと？」

本気じやないか……

——アルヴァと戦うときは闘技ではないにしろいつも本気だ。

——ノルンが手に入れた力、全てを出して戦っている。

——それでも、本気ではないとアルヴァは言つ。

——ノルンはアルヴァの目を見る。

——真つ直ぐ、真剣な目でノルンを見ている。

〔冗談じやないみたいだな……〕

——ノルンは決心した。

「……アルヴァ」

——ノルンは、普段アルヴァの名前を「やん」と呼ぶ「J」とはない。

「決闘をしよう」

「…………やつきたか。…………ああ、わかつた

一度目の真剣勝負……

「俺は本気で勝ちに行く。だから、アルヴァ初めから本気で来いよ
「やつとか……」

「――アルヴァは待ち望んでいたみたいだ。

「――人はお互いライバルを見据えている。

「――そして……

「「絶対負けない」」

――一人の声が重なった。

――もう一つノルンには聞いとかなればいけないことがあった。

「後一つ、……アルは本気の俺に勝つたら、その強さで何をしたい
？」

「…………さあな、勝つてみないとわからない

俺と同じか……

――ノルンもエリアに『勝つたら?』の答えに答えられなかつた。
――勝てないからわからない。ならば、勝つたら答えができるんじや
ないかと……

――『手続きはしどく』とノルンは言つて、先に出て行つた。

準備をしなきやな……

——手続きをし、明後日の朝に決闘が決まった。

——その日の夜、ノルンはマークとミーナにそれぞれ話を付けた。

決心（後書き）

今回も短めですT_T

次からいつも通りに戻しますv_v

感想・評価お待ちしてます^_^

二人の過去（前書き）

一気に決闘当日に飛びます。

一人の過去

「……六年ぶりだな」
「そうだな。……わあ、闘^やうつか」

——ノルンとアルヴァはお互い武器を構え向き合っている。
——アルヴァの武器はメイスだ。それもマークが作ったもの、非常に強力な武器。

——先に魔導石が付いている。
——審判が両者を見渡し

「両者……」

「……ノルン、六年前からお前に勝つのが目標だった」

——アルヴァは審判が話しているのにも関わらず話し続ける。

「お前……あの時、わざと負けたよな?」

「……」

——ノルンは答えない。

「……わざととわかつていて勝ちをもうつた俺を……許せない……」
あの時かあ……
ばれてたんだな……

——六年前——

——『ノルン』に、アルヴァー一家が来ていた。

——それまでよく来ていたが、この日は特別だった。

「さあ、ノルン、アルヴァー君。準備はいいかな？」

——マークは一人に確認する。

——二人は頷き、マークに連れられ外へでた。それに続き、ミーナとアルヴァーの両親が外へ出る。

「さあ、二人の初めての闘いを始めようか」

——ミーラル共和国では10歳から武器を持つことが許されている。

——この日は、ノルンとアルヴァーが初めて武器を使う日だった。

——お互い、模擬の武器で使い方は心得ている。

——一人の武器は魔導石が埋め込まれた剣だ。

「相手に遠慮せず、全力で闘いなさい。それでは……」

——マークは一人を見て

「開始」

シユツ

——先にノルンが攻撃をする。

——それをアルヴァーは受ける。

「火よ（フュウ）」

——ノルンは避け、一旦引く。

——そして、ノルンは攻撃動作につつづく、近づいてみると

「火よ（フュウ）。水よ（ヒアウ）。雷よ（トントレ）。木よ（アーベレ）。土よ（ソレ）」

いつきに…？

——アルヴァは自分の異能を惜しみなく使い、全ての属性を一度顕現させる。

——この年では、アルヴァでも指示はだせなかつた。

よけれる！

——その時、ノルンはアルヴァを見てしまつた。

「はあ…はあ…

つらそひ…

——この歳のアルヴァでは一気に魔法を使つことは厳しかつた。

——アルヴァはノルンの唯一の友達だつた。

——そんなアルヴァの様子を目のあたりにしてノルンは避けられなかつた。

「ぐつ…

「アルヴァ君の勝利」

ぼくのまけか…

——一人の両親はお互いに寄つて行つた。

——両親は『よくやつた』など声をかけている。
——そんな中、アルヴァはノルンをにらんでいた。……ノルンはそのことに気付いていなかった。

あの時かあ……

あのまま闘ついたら俺の勝ちだつたな……

「……俺もわざと負けた自分を許せない」

「……お互い強くなつたな……」

「ああ……」

——お互い六年前の相手と比べてこる。

「手加減なしだ」

「わかつてゐ、俺の全てを出して勝つ」

「俺が勝つ」

——一人が話している間に審判の話が終わつた。

「……では、両者、ようじこでじょうか?」

「「はい」」

——一人は『よろしく』とは言わない。

——この決闘は一人にとつて六年前の続き。

「では……決闘開始!!--」

——六年越しの闘いが始まった。

一人の過去（後書き）

過去パートですへへ

感想、評価待つてまーす

決闘1

「決闘開始！」

——観客は騒いでいる。

——闘技場を埋め尽くすほど観客。

——授業に出でずに見に来ている生徒、教授、町の人、ノルンの親。

——いろいろな人が一人の闘いに注目していた。

——だが、そんなことは一人には関係ない。

——ノルンは剣を一本構えている。ノルンの腰には構えている剣とは別に一本携えられている。

「…光と影よ（ルミエレ エトゥ オンブレ）…暗まし輝け（レディシミール エトゥ ハラット）」

——唱えたのは、ノルンの方だった。

「魔法…それも光影魔法かよ……」

「光影魔法」

——光影魔法、火水木土雷の属性魔法の外にある特殊魔法の一つだ。

——希少な才能がないと使えない。おそらく、学園で使えるのはノルンのみだろう。

——特性は強力の一言に尽きる。

——『光は全ての物を破壊し、影は全ての物を飲み込む』

——ノルンを中心に暗くなる。

——アルヴァは驚きながら

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な物理の力で
我を覆え（コープレズモイ ポウヴォイ フォシクエ ピウ）」

——アルヴァが詠唱を終えた頃には、アルヴァの所まで暗さが広が
つていた。

——そして、次の瞬間。

「うつ……」

——ノルンからまばゆい光が放出された。

——その変化にアルヴァの目は付いていけない。

今だ！

シユツ

——アルヴァが目をくらましている所をノルンは斬りかかる。

——しかし、ノルンの剣はミストの時どおりよう魔力の壁に防がれ
た。

ここまでは予定通り……

「驚いたが、まだ剣は届いてないぜ」

「……まだ一つある」

……ふう……

「ハア——！」

——ノルンは声にだし

ポアツ…

——剣が薄く光る。

——魔力による発光。

ピキッ…ピキ…ピキ…ピキッーン

「なつ…?」

——アルヴァの魔力の壁がなくなつた。それと同時にノルンの剣も粉になり柄だけが残つていた。

——ノルンにはまだ剣が残つている。しかし、ノルンは攻撃はしない。

——お互いそこで硬直する。

「…なんで、斬らない?」

「アルヴァ、君には正々堂々勝ちたい」

こんな不意打ちみたいな勝ちはいらない…!!

「……なるほどな」

——ノルンはアルヴァから離れて行く。

「…それがお前の力か?」

「……俺のじゃない」

俺は…この力を認めるわけにはいかない…

——ノルンは背を向けながら続ける。

「INの力は……母さんと父さんの力だ……」

「やうじゅことか……」

わかつたみたいだな……

——ノルンは開始位置に戻り、あらたな剣を構え直すと

「……仕切り直しだ」

決闘1（後書き）

投稿で す^ ^

ちょっと短いですね:T—T

感想・評価待つてま～すく>

決闘2（ハルンの方）（前書き）

前投稿した次の日に見直したら……

これは……

つてなつて、一旦消しましたT_T

すみませんm(_ _)m

書き直したので再投稿です^ ^
ストーリーは変わっていませんv v

決闘2（ノルンの力）

――決闘の前々日――

――ノルンはマークの部屋を訪ねた。

「父さん、今いい？」

「ああ。いいぞ」

――部屋に入る。

――ノルンの腰には、剣が携えられていた。

「うん？ 家で剣を持つのはマナー違反だぞ」

「父さん……、明後日、アルと決闘することになった」

「……やつとか」

――マークは驚かない。いずれ闘うライバルだとわかつていた。

「悔いの残らないようにな

「ああ……それで父さんに話しかけなければいけないことがあるん

だ……」

「……」

――マークはノルンの真剣さが伝わったのだろうか、ノルンの目を見ながら

「……頼つてみる」

「……」

——ノルンはなにもいわず剣を構え

「ハア——！」

——ノルンは剣に魔力を込めた。

——剣が薄く光る。

「それはつ！？」

——マークは今ノルンがやっていることに覚えがあった。

ピキ……

——剣は割れ、粉となつた。

「……魔力注入。ノルン……なぜ使えるんだ……？」

——魔力注入、魔力を用いた鍛冶技術だ。

——通常、炎では溶けない物を加工する為の技術だ。

——一定の量の魔力を入れ続けると段々物質が柔らかくなる、魔力のあまり知られていない特性だ。

——この技術は、物体の性質、物体の異物の確認など、鍛冶の知識に精通していなければ使えない。

——なにも知識がない人が行うなら、物質に魔力が入らないだろう。

——ノルンは出来るが魔力の制御が拙いため、粉にしてしまう。

「リビングで話すよ……先に行つてて」

さ、次だ……

——ノルンは次はミーナの部屋を訪ねていた。

「母さん…、明後日アルと決闘することになった」「そうなの。じゃあ、見に行かなきゃね」「

——ミーナはいつもの調子で返す。

「ちょっと……見て欲しいものあるんだけど……」「うーん? なあに?」「

——シリアスな雰囲気にはならない。

——ミーナはマイペースだつた。

「光と影よ。（ルミエレ エトゥ オンプレ）姿を現せ（パライゼツ）…」

「……ノルンも使えたんだ」

——異能な光景だらう。

——ノルンの体を中心に片方には光、片方には影ときれいに別れていた。

——ミーナは落ち着いている。

——だれが持つてもおかしくない才能だ。

「リビングで話すよ…」

——ノルンはミーナとマークに向かい合つて座つている。

——ノルンはミーナを連れ、リビングへ行つた。

「 」「 」「 」

——ノルンが話すのを待つている。

「 実は俺 異能持ちなんだ……」

「 ほお……」

「 そうね……」

「 うん? 」

——ノルンは予想の斜め上をこへ返答に困惑した。

「 ええと……それだけ? 」

「 ああ。異能持ちなら納得いくこと多いかな」

「 そうよね~。昔から子供っぽくなかったからね~」

父さんも普通だ…

——ノルンはマークが帝国出身なので、亜人には偏見があると思つていた…

「 どんな異能なの? 」

「 …『 遺伝』の異能…父さんと母さんの才能と知識、結構受け継
いるんだ」

そう、それが16年間隠してきた俺の秘密…

「 だから、あれが使えたのか…しかし、その異能は…」

「 あらあら、素敵な異能ね。私たちのこと受け継いでるだなんて」

——マークは何やら考へて居る。ミーナはロマンチストだった。

あれ？

なんだかすつゝい穏やかな感じする…

——秘密を明かしたんだ、ノルンは肩の荷がおりたようだ。

「…明後日の決闘、母さんと父さんの力借りていいかな？」

「いいわよ。存分に使いなさい…ね、あなた」

——マーク真剣な顔で

「……ノルン。その異能はきっと大変な異能だ…。それと共に生きる…その覚悟はあるんだね？」

わかつてゐる…

一度使つたらもう戻れないことも…

——ミーナは話に付いていけない。

——世界で異能に対しても研究が行われて居る。

——ノルンの異能はきっと希少な物だろう。

——…それ以上に危険な物もある。

「…もう覚悟はした」

——ノルンは異能の力を知つて居る。

——もし、この力がノルンの子へ、そして孫へと受け継がれていく
とどうだろう…

——ノルンはその重大さをわかつて居る。

——マークを真つ直ぐな目でみる。

「そ、うか… そ、れな、ら、そ、の力はも、うお、前、の物だ。… 勝つてこ、い」

――決闘――

「仕切り直しだ」

「ハハハツ！… これだよ」

――アルヴァは笑い出した。顔も笑顔で溢れている。

「これがお前の本気か！… ずっと待つてたぜ…！」

――アルヴァは声を上げ

「ノルン…！ 僕は今のお前と闘つ為に… いや、勝つために強くなつた…！」

――アルヴァはメイス構え

「お前がいたからここまで強くなれた…！ …… ありがとよ

――対してノルンも

「俺も。アルヴァ、君がいたから…」

――ノルンも剣を構え

「… 君が目標だつたからここまで強くなれた… ありがとう」

――一人はお互いを見合つて

「さあ、こい……アルヴァ」

「いくぞ……ノルン」

――一人の忘れられない闘いが幕を開けた。

決闘2（ホルンの力）（後書き）

過去の話なので、心情描写少なめに…^_^

そろそろ一部終了な予感します^_^；

感想、評価よろしくお願ひします。

決闘 決着（前書き）

結構間空きましたーーー

決闘 決着

——アルヴァは詠唱をする。

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な力で敵をはじけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

——アルヴァの魔法は、魔力その物指示を「」える魔法。

——魔法の壁やミストを倒した魔法だ。

——不可視で、詠唱後の顯現が必要ないため非常に速い。

——しかし、一度に2つの命令をすることまだアルヴァにはできない。

たかが見えないだけで…

——ノルンは不可視の魔法を避ける。

「そんな魔法じやあ、あたらない！！」

——ノルンはアルヴァの首元に向け、剣を突いた。魔法の壁を作る暇もなく…

——だが

——そこは、アルヴァの首元ではない。

——アルヴァは少し体を傾け避ける。

——ノルンの攻撃は正確だ。最小限の動きのみで攻撃するため、少しの動きのみで避けられる。

「…雷よ（トンネレ）」

——ノルンの上から雷が襲う

「！？ 影よ（オンブレ）！」

——アルヴァの魔法がノルンの影の魔法に飲み込まれた。
——影はすぐ消え、再びノルンの剣がアルヴァをおそう。

ガツキーン！！！

——アルヴァのメイスとノルンの剣がぶつかった。

——ノルンはすぐさまその場を離れる。

近づきすぎたら魔法でやられる…

——また距離があいた。

——アルヴァは笑いながら

「これは受けられるか！？ 我が魔力よ（モン ポヴォイア マギ
クウ）、純粹な力で敵をはじけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォ
イア）」

わざと同じ…？

——ノルンは先ほどと同じ動作で避ける。

「雷よ（トンネレ）、鳴け（アペレ）」

——何もない空間から雷が炸裂した。

「…？」

——ノルンは避けられなかつた。

「これはつ！？
こんな使い方が…」

——魔法は自分の魔力の届く範囲でのみ使用でき、指示を下さることで行動する。

——つまり、魔法は自分の位置からしか出せない。

——しかし、アルヴァは魔力を飛ばすことでの位置でも魔法を出せる。

「せこいな…」

「…それはお互い様だろ？」

「ああ……光よ（ルミエレ）、解き放て、破滅の力を（ライセ ポウヴォイ デ レ デスト デガッジ）」

「ちつ……我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な魔法の力で我を覆え（コーブレズモイ ポウヴォイ フォシクエピウ）」

シユーネツ……

——ノルンの光はアルヴァの魔法の壁を溶かしたが、アルヴァには届かなかつた。

——そのとき、ノルンはアルヴァにちかづいた。

「さすが、アルだな」

シユーネツ……

「くつ…、もつと楽しむつぜ！… 水よ（ニアウ）」
「影よ（オンブレッジ）…、ああ…光よ（ルミニア）！」

——アルヴァの水を影が飲み込む。そして、光がアルヴァを襲う。

「うう…、ノルン、去年の試合のこと覚えているか？… 土よ（ソーレ）」

あの時か…

——ノルンの足は土にとらわれた。

「ああ…。影よ（オンブレ）」

——足の周りの土を影が飲み込む。

「あのときが最後の試合だつたよな…。木よ（アーベレ）」

——ノルンの足下から木がのびる。

「やうだつたな…」

——それを剣でなぎはらつ。

去年のあの試合か…

——ノルンとアルヴァは何度も試合をしていた。いつもノルンが負けていたが…

——結果だけを見れば、最後の試合もアルヴァの勝ちだった。

あのとき…俺はアルを追いつめていた……
でも、ミストと同じ……
あの魔力の魔法で負けた……

——その時、ノルンがアルヴァの本気を見た時だった。
——そして、アルヴァは試合が終わると

『…ノルン、もう試合はやめようぜ』

「あのとき、きっとノルンなら、いつか決闘を申し込んでくれって
確信した。雷よ（トントレ）」

「くつ…なんである時、あんなことをいつたんだ？ 影よ（オンブ
レ）」

——ノルンの出した影がアルヴァを飲み込もうとする。

「木よ（アーベレ）。… あなた、ただ試合より闘技でたたかいたく
なったからな」

——アルヴァは足下に木で壁を作り、影を避けた。

「もうか」

シユツ

——ノルンの剣がアルヴァを襲つ。

「土よ（ソレ）」

グサツ

——アルヴァは土を水でかため、火であぶり、固い壁を作った。

——ノルンの剣はアルヴァの作った土の壁に防がれた。

「なあ……ノルン、この闘い終わったらまた試合しようぜ」

「ああ……、この闘いは俺が勝つからな」

「いや、俺だね」

——一人は距離を取り構え直した。

——周りから見れば異様な闘いだつただろう。

——二人は会話しながら、剣、魔法を使いこなし、攻撃を繰り返していた。

——それも学院のだれも、追随をゆるさない実力で……

——しかし、その闘いも終わりが近づいているようだ。

「……次で」

「ああ……次で」

——一人には言わなくともわかっていた。

『次で最後だ』

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な力で敵をはじけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

——先に仕掛けたのはアルヴァだった。ノルンは避ける。

「火よ（フュウ）、水よ（エアウ）、雷よ（トントレ）、木よ（アーベレ）、土よ（ソレ）。力を解放し（ライセ デ ボボア）、終わらせ（レガチ エト チマイン）」

この魔法は…！

——ノルンの避けた所から魔法が炸裂する。

——その魔法は全属性の最上級魔法。

——全属性の力がノルンを襲う。

なら、俺も…

——ノルンも

これが俺の最大だ！！

「光と影よ（ルミエレ エトウ オンブレ）。すべてを破壊しすべてを飲み込め（デトルイ エト アヴルイ トウト）」

ドツーッ…

——爆音が鳴り響き、砂煙、霧、木屑、火の粉、電気が宙にまみれ、光と影が渦巻いた。

——闘技場中の視界が遮られる。

終わってない！！

——ノルンは見えなくても前に進む。

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な物理の力で

我を覆え（「—ブレズモイ ポウヴォイ フォシクエ ピウ」）

見えないッ！？

——ノルンはアルヴァの姿が見えない。

——だが、ノルンにはアルヴァの詠唱で位置がわかつた。

「ハ———ッ！！」

——剣に魔力を込めた。

きつと…

キーンッ！——！

——ノルンの剣と魔力の壁がぶつかった。

——ノルンの剣は剣身が無かつた。

——視界が明らかになつていく

「ちつ、壁壊されたか…」

「……楽しかつた」

——ノルンの剣身のない剣はアルヴァの腹にあつた。

「……俺もだ……俺の負けだ……」

ドサッ……

——アルヴァが倒れ、その場に立つていたのはノルンだった。

『ワアアア――――!』

――闘技場は歓声で爆発したが、

――ノルンはただただ倒れたアルヴァをみてたたずむだけだった。

勝つた……でも……

決闘 決着（後書き）

一部完！…つて感じです。< >

感想、評価よろしくお願いします。

——これはノルンの出生の話——

「おぎや———」

「えがでる……」

あ、そうか……

ぼくうまれたんだ。

…

…

……あれ？ ぼく……まだうまれたばかり……だよね？

——少年は生まれて初めての疑問を持った。

——自分自身への疑問だ。そして……

——そのとき、少年に莫大な知識が一気に流れ込んだ。

——少年は看護士に抱かれ、母親とともに分娩室から出た。

「あなた……」

「よべがんばつたな。」

——父親は涙ながらに、母親に駆け寄った。

「ええ。……それよりも私たちの子よ……」

「ああ……俺たちの子だ……」

——少年は自分の知識を理解した。

そつか……ほくこの「もむかし」の話なんだ。

それよりも……

——少年には異能の「じゆめい」、もつと重大なことがあった。

——少年は顔を上げ、母親と父親を見比べた。

——「のうとたうが、おとうわん、おかあわん……ね。

「おうわや————おうわや——、おうわや——」

——少年は両親に向か

(せじゆまつて、おとうわん、おかあわん)

闇話 H e l l o (後書き)

めちめくひめ短いです^ ^

感想、評価待つてます

今月中には第一部始めます^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6192s/>

戦えない力

2011年6月1日21時14分発行